

氏名	竹内 彬
ヨミガナ	タケウチ アキラ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博第 14 号
学位授与年月日	2021 年 3 月 12 日
学位論文題目	ドビュッシーの音楽が「ロシア的」とみなされた歴史的背景 ——当時の言説とドビュッシーの管弦楽法の考察を通して——
博士論文審査委員会	(主査) 教授 四戸 世紀 (クラリネット) (副査) 教授 藤田 茂 (音楽学) (副査) 教授 武石 みどり (音楽学) (副査) 教授 藤原 豊 (作曲) (副査) 井上 さつき (音楽学) (愛知県立芸術大学教授)
博士演奏等審査委員会	(主査) 教授 四戸 世紀 (クラリネット) (副査) 教授 工藤 重典 (フルート) (副査) 教授 小串 俊寿 (サクソフォーン) (副査) 教授 佐藤 俊 (ピアノ) (副査) 教授 釜洞 祐子 (声楽) (副査) 教授 藤原 豊 (作曲) (副査) 教授 藤田 茂 (音楽学) (副査) 松本 健司 (クラリネット) (洗足学園音楽大学教授、 NHK 交響楽団クラリネット奏者)

## 審査結果の要旨

### 1. 博士論文審査委員会

日 時	2021年2月9日(火) 14時00分～16時30分
場 所	Zoomでの開催
判 定	合格
審査結果の要旨	<p>竹内彬の学位申請論文『ドビュッシーの音楽が「ロシア的」とみなされた歴史的背景—当時の言説とドビュッシーの管弦楽法の考察を通して—』は、ドビュッシーの音楽、なかんずく、その管弦楽法がロシア的であるかどうかを判定するのではなく、世紀転換期のパリにおいて、ドビュッシーの音楽がロシア的と批評されたという事実を出発点に、それがロシア的とみなされた歴史的な背景を浮かび上がらせるものである。いくつかの批評言説の解釈にさらなる成熟が求められる点があるとはいえ、国外調査も行いつつ丁寧に蒐集した、膨大な量のフランス語批評を丹念に読み込み、ドビュッシーの音楽とその受容の一側面を浮かび上がらせたことは積極的な評価に値する。また、本論文におけるオーケストラ・スコアの分析は的確であり、さらに、本論文の議論の全体は、演奏家によって直感的に捉えられてきたものに学問的な裏づけを与えるという意味で、授与対象となる音楽博士の学位にふさわしい。よって、博士論文審査委員は、全員一致で、竹内彬の学位申請論文を合格と判定した。</p> <p>ただし、リポジトリ登録までには、誤字・脱字の修正に加え、以下の指摘を踏まえて、言説解釈と論文の議論の運びに、若干のブラッシュアップを施すことが望まれる。</p> <p>・言説解釈について 第1章では、パリのロシア音楽受容にとって重要な意味をもったと思われる1878年、1889年、1893年、1907年の演奏会の批評が考察されるが、1893年と1907年の間に、フランス国内におけるドビュッシー評価に決定的な意味をもった《ペレアスとメリザンド》が初演されていることを考慮に入れていれば、より深い言説解釈ができたのではないかと考えられる。ロシア的なものの洗練としてドビュッシーが評価されるのとは逆に、ドビュッシーの社会的な成功によって、その似姿としてのロシア音楽の受容が促進されたという側面もあったはずである。また、第2章のアンドレ・ジッドをめぐる言説は、《夜想曲》と結びつけられるものではないこと、また、カルヴォコレッシのいう「もっとも若いフランスの作曲家たち」のなかにおそらくドビュッシーは含まれていないことなどを理解したうえで、関連する言説を読み直してもらいたい。</p> <p>・議論の運びについて 本論文の第2章には、約4500号分の音楽雑誌、約100号分の一般雑誌に加えて、37年間の日刊紙のなかから、25人の批評家による、ドビュッシーをロシア的とみなす批評を35個発見したことが記されている。この「25人による35個」の分母はいくつであるのかを明記したうえで、これら35個の批評がドビュッシーのいずれの作品を対象とするものであったのか、そのリストと内訳を最初に示したほうが、読み手に対して親切であったと思われる。また、そのようにすれば、ドビュッシーの作品の管弦楽法をロシア音楽と比較する第3章において、なぜ、いま選ばれている4作品が選択されなければならないかが分かりやすくなったはずである。</p> <p>しかし、以上の指摘は、本論文の本質的な価値を毀損するものではない。音楽実践と音楽研究を結ぶ音楽博士として、竹内彬のいっそうの活躍に期待する。</p>

## 2. 博士演奏等審査委員会

日 時	2020年12月4日(金) 18時00分～ 19時10分
場 所	東京音楽大学 池袋キャンパス A ホール
判 定	竹内氏は『ドビュッシーの音楽が(ロシア的)とみなされた歴史的背景—当時の言説とドビュッシーの管弦楽法の考察を通して』というテーマで博士研究をしている。この研究テーマと関連付けられたプログラミングが良かったこと、表現内容の異なる各々の曲に美しい音、音程の良さ、素晴らしいテクニックで反応、表現も秀逸だったため、審査員全員一致で合格と判定した。
審査結果の要旨	<p>フランク：フランクのヴァイオリンソナタをクラリネットで演奏するチャレンジ精神を評価する。ソナタということで、ヴァイオリンとピアノ、ここではクラリネットとピアノは対等であり、2つの楽器の世界という視点で聴けば、とても素晴らしい一体感が演奏にあった。</p> <p>グズノフ：東洋的な響きを表現するのはクラリネットがベストかもしれない。弱奏でない中音域がもの悲しく美しく吹けていた。ただこの曲に関しては、きれいな音色を部分的に取って除外することがあっても許された。</p> <p>リムスキー・コルサコフ：クラリネットの良さを余すところなく表現できる曲でとても楽しむことができた。ただプログラムの前後を考えると、もっと「下品」「粗野」な部分があっても良かった。</p> <p>ドビュッシー：この曲はピアノパートが見事につくられていて、クラリネットがその響きの中に溶け込むようにあるいは浮き出てくるように配慮された素晴らしい演奏であった。ロシアとドビュッシーの関係という論文のテーマについても、音による照明を果たしていたと思う。</p>

以上